

接尾語の“族”を通じて中国社会的現状をみる

戦 慶 勝

1. はじめに

流行語はある期間において盛んに使われる表現であり、ある社会の現状を反映するものである。そのため、流行語を通じて時代の流れを把握することができる。1980年代前半から、中国は高度成長を迎えた。改革・開放政策が実施されて以来、新しい社会現象が次々と生まれることに伴い、新しい表現スタイルも続々と登場してくる。世間の人々が盛んに使う表現スタイルを観察することは社会変化や社会現状を理解することにつながることもある。

第二言語習得の立場からみれば、世間の人々が盛んに使用している表現スタイルを理解することは、教育効果や表現能力のアップにつながる。本稿では、接尾語の“族”によって構成される流行語を研究対象にし、現在盛んに使用されている“啃老族”“隠婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”“蚁族”“鼠族”といった表現を通じて中国社会の変化や今日の現状を観察したい。

2. “族”の意味範疇

歴史的にみて、“族”[zú]¹は名詞や動詞として使われることがあり、また、形態素や接尾語として使われることもある。ただし、名詞としての歴史はもっとも長い。本稿でとらえる“啃老族”“隠婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”“蚁族”“鼠族”などにおける“族”は接尾語であるが、接尾語としての意味・用法はもっとも歴史が短い。

“族”は名詞として使われる場合は、①血縁関係を持つ親族、②古代の地方組織、③民族、部族、といった意味を表す。元結（唐）の《与襄溪邻里》“昔年苦逆乱，举族来南奔。”（昔、動乱に苦しんでいたので、一族を挙げて南に逃げてきた）における“族”は①の「血縁関係を

キーワード：流行語、族、中国社会

¹ “族”は[zú]のように発音するほか、[zòu][còu]のように発音することもある。[zòu]のように発音されれば、“奏”に通じ、音楽のリズムやテンポの意味を表すことになり、[còu]のように発音されれば、“簇”に通じ、群らがるという意味を表すことになる。

持つ親族」という意味を表している。

②の「古代の地方組織」という意味については、《周礼・地官・大司徒》では、“令五家为比，使之相保；五比为闾，使之相受；四闾为族，使之相葬；五族为党，使之相救。”（政府が次のように発令した。五世帯を一比とし，互いに守りあうようにさせる。五比を一闾とし，互いに助けあうようにさせる。四闾を一族とし，葬式の助け合いをさせる。五族を一党とし，互いに助け合うようにさせる）のように説明されている。

③の「民族」という意味は，英語の Ethnic group，または Nation の訳語である²。そもそも，古代の中国には「部族」という概念はあったが，「民族」という概念はなかったようだ。六世紀の《南齐书》に“今诸华士女，民族弗革”³（今日，多くのぜいたくな振る舞いをする未婚の男女が集団となり，変わろうとしない）という表現があった。しかし，この場合の“民族”は「人の群れ」として解釈しなければならず，今日でいう「民族」（Ethnic group，または Nation）の意味を表すわけではない。“民族”は Ethnic group，または Nation という意味を表すものとして中国語に定着したのは20世紀に入ってからのものであろう。

動詞として使われる場合は，①一族を皆殺しする，②打ち殺す，といった意味を表す。例えば，《史记・魏其武安侯列传》“及系，灌夫罪至族，事日急，诸公莫敢复明言于上。”（早速縛った。灌夫の罪は族滅に至った。執行の日，急いでやったので，大臣たちは再び皇帝に報告する勇気がなかった）の中の“族”は①の「一族を皆殺しする」という意味を表すので，動詞である。

また，杜牧（唐）《阿房宫赋》“族秦者，秦也，非天下也”（秦を滅ぼしたのは秦自身であり，天下の人々ではない）の中の“族”は「滅ぼす」「滅亡させる」の意味として解釈することができるので，②の「打ち殺す」という意味に近い動詞にはかならない。

形態素としての“族”は“民族”“汉族”“族群”“族长”のように単語を構成するが，単語内部の意味構造として違いがないわけではない。“民族”“汉族”における“族”は前置の形態素の限定修飾を受けているのに対して，“族群”“族长”における“族”は後置の形態素の意味に限定修飾を加えるものである。

接尾語として機能する“族”の意味・用法はおそらく現代に入ってからのものであろう。これは日本語の影響を受けたものと思われる。1950～1960年代ごろ，日本語に生まれた「カミナリ族」や1970年代から1980年代にかけて大きく社会問題化した「暴走族」，さらに1978年に登場した「窓際族」などにおける「族」は，ある傾向のグループを表す接尾語であり，そのような意味・用法は台湾に伝わり，台湾を通じて中国本土に伝わったと考えられる。

本稿でとらえる“啃老族”“隱婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”“蚊族”“鼠族”

² 郝时远 (2002) は「民族」という語は近代になって日本語に入ったとしている。日本語では Ethnic group や Nation といった名詞を翻訳するために，“民族”に新たな意味を与えたという。その後 Ethnic group や Nation といった概念は日本語を通じて中国語にも定着したとしている。（《Ethnos（民族）和 Ethnic group（族群）的早期含义与应用》，《民族研究》2002年第4期を参照。）

³ 《南齐书》列传之三十五《高逸传·顾欢传》。

における“族”は「ある傾向のグループ」を表す接尾語であり、日本語の「暴走族」や「窓際族」の意味・用法とはほぼ共通している。このことから、日本語と中国語の特殊な、複雑なつながりが見えてくる。

ただし、“啃老族”“隠婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”の語構成には、一つの類似点がある。それは“族”が後続することによって前置の動詞フレーズに含まれた動作的意味が捨象され、“啃老族”“隠婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”が一名詞になったということである。また、“蚁族”“鼠族”の単語内部の意味構造については、「蟻のように振る舞う人間のグループ」、「ネズミのように振る舞う人間のグループ」のように解釈することができるので、前置の“蚁”や“鼠”は、引き合いに出されて比喩的に用いられる形態素である。

3. 新語と流行語の違い

社会言語学の観点からみれば、新語や流行語は時世の有り様をリアルに映し出しているの、それに関する研究は社会の変化や社会の現状を観察するのに役立つものである。しかし、新語と流行語はけっして同じものではない。新語は新しく生まれた概念を表現するための単語であるのに対して、流行語は急に世間一般に行き渡り広がる現象を表す表現としてとらえられる。つまり、新語は流行語に含まれることがあるが、流行語は必ずしも新語であるとは限らない。

例えば2009年、中国の《国家语言工作委员会》は2008年の流行語を発表した。359の表現を流行語として認定されたが、その中で“山寨”⁴はもっとも使用頻度が高く、それに続いて、“三聚氰胺”⁵“堰塞湖”⁶がそれぞれ二位と三位を占めている。しかし、“三聚氰胺”や“堰塞湖”は古くからあるものなので、新語とはいえない。

さらに、流行語は既存の表現に新たな意味が加わる場合もある。例えば、2013の流行語とし

⁴ “山寨”はもともと、とりである山間の村を指していたが、今は偽ブランド、パクリ商品や物まねの意味を表すようになった。偽ブランドやパクリ商品を指す意味は1970年代の香港に生まれ、1980年代に広東の沿岸部に伝わった。偽ブランドやパクリ商品を表すものとして、“山寨货”(パクリ商品)“山寨版”(海賊版)“山寨手机”(偽ブランドの携帯電話)のような表現があり、物まねの意味を表すものとして、“山寨明星”(物まねスター)“山寨春晚”(春節に放送する芸能バラエティ特別番組を真似する放送)のような表現がある。

⁵ “三聚氰胺”は化学物質のメラミンのことである。2008年9月8日、メラミンで汚染された粉ミルクを飲んだ乳児14人が腎臓結石になったことが明らかにされた。粉ミルクは河北省石家荘市の「三鹿集団」によって製造され、同社は8月6日以前に製造した粉ミルク700トンの自主回収を決定した。この事件の責任を取り、国家質検総局の李長江局長は辞任した。2008年12月、三鹿集団は破産申請をした。2009年1月22日、河北省石家荘市の中級人民法院は、酪農業者ら2人に死刑を、三鹿集団の元会長田文華に無期懲役の判決をそれぞれ言い渡した。

⁶ “堰塞湖”は堰止め湖のことである。2008年、四川大地震で四川省北川県の唐家山にできた巨大な堰止め湖は下流の人々の生命や財産に二次災害をもたらす危険があるので、毎日のようにテレビで報道され、国民の関心を集めた。

て、“土豪”⁷は得票率をもっとも高かった。この表現は本来、悪質な地主や地方のボスを指していたが、今では、にわかに大金持ちになり、値段を問わず高価なブランドを購入し、富を見せびらかす愚かな裕福層を指すようになったのである。

このような意味の変化により、“土豪婚礼”（誇示される結婚式）“土豪汽车”（誇示用の車）“土豪心态”（誇示したい精神構造）“土豪文化”（誇示したい意識文化）のような表現も生まれた。これらの表現は社会の醜悪な面をさらけ出していると同時に、貧富の格差に対する国民のいらだちも反映しているのである。

2009年中国《国家语言工作委员会》が公表した359の流行語の中に“族”という接尾語を含む語が多くあった。これらの“族”を含む流行語は社会変動の表れでもあるので、それを時代の足跡として記述することは、ある程度、中国人のライフスタイル、中国の社会現状を理解するのに寄与できると考えられる。

新しい表現スタイルは多くの人々の間で盛んに使われていれば、流行語になる。とくにインターネットが発達している今日では、何かのきっかけで新しい表現がネット上で使用され、その後、一般に受けられたら、流行語の誕生になる。すぐにすたれるものが多いが、社会現象を映し出すものとして定着するものも少なくない。

ただし、“山寨”や“三聚氰胺”“堰塞湖”，さらに“土豪”などが社会の変化をリアルに映し出しているのと異なって，“族”という接尾語を含む流行語は社会の変化を映し出していると同時に、しゃれているという側面も持っている。

4. 接尾語の“族”を含む流行語

“族”という接尾語は生産性が高いので、2000年以降、それを含む流行語が数多く生まれた。以下では、中国社会の今をよく映し出している“啃老族”“隐婚族”“混章族”“月光族”“撞车

⁷ “土豪”という表現は宋の時代にすでに使われていた。《宋书·殷琰传》“叔宝者，杜坦之子，既土豪乡望，内外诸军事并专之。”（叔宝という人は、杜坦の子である。地方の豪族で人望があるので、内外の軍事を掌握している）。《南史·韦鼎传》“州中有土豪，外修边幅，而内行不轨。”（州内の豪族は外見的にはセンスがよいが、内面的には違法行為を企んでいる）における“土豪”は地方の金持ちや豪族を指すものである。

顾炎武（清）《与人书》“马角无期，貂裘久敝，惟长者垂悯孤根……不至为土豪鱼肉，即石田十顷徐图转售，尚得为首丘之计。”（馬車がなく毛皮の服もぼろぼろになっている。ただ年長の人がこの唯一の跡継ぎに同情を寄せているので、……悪人の食い物までにはなっていない。目下は10頃頃の瘠せた畑を少しずつ転売し、それによってやっと仮埋葬ができた）。郝懿行（清）《晋宋书故·土豪》“然则古之土豪，乡贵之隆号；今之土豪，里庶之丑称。”（しかし、昔の土豪は地方の豪族だが、今の土豪は町村の悪者である）の中の“土豪”は地方の悪人を指している。

また、文天祥（宋）《己未上皇帝书》“至如诸州之义甲，各有土豪；诸峒之壮丁，各有隅长。彼其人望，为一州之长雄。”（各州の義兵に至ってはそれぞれ親玉が選ばれており、各グループの壮丁もそれぞれ得意とするところがあり、その人望はその州においてはトップである）の中の“土豪”は地域のリーダーや集団のボスを指している。

族”“考碗族”“蚊族”“鼠族”に絞って社会言語学の観点から、これらの表現の指し示している社会問題とその背景的要素について考える。

4.1. “啃老族”

NEET は Not in Education, Employment or Training の略で、正式な仕事を持たず、学校で職業訓練も受けず、もっぱら親の支援をたよりにして生活している若い人を指すが、“啃老族”も NEET とほぼ同じ意味を表すものである。“啃老族”は動詞の“啃”（かじる）と名詞の“老”（お年寄り・両親）と接尾語の“族”からなっている。この三つの形態素によって構成される流行語は大人になっても、独立できずに、親のすねをかじる20代、30代の若者を指す。

“啃老族”という表現は上海などの都市部を中心に流行っている。“啃老族”という現象は社会問題になっているが、なぜそのような現象が生まれ、しかも、それが年々増えているのかといえば、原因は若者自身とその家庭に求められる。

若者自身の原因としては、現実から逃避するということが指摘されうる。“啃老族”と称される若い人たちは一人っ子政策が実施された後に生まれ、甘やかされて育ったため、ハングリースピリットが欠けている。彼らは高学歴であるとはいうものの、傷つきやすい世代とも言われている。つまり、ぜいたくな生活を求めているのと対照的に、苦しみやつらさを耐え忍ぶ根性が欠如しているのである。

“啃老族”たちは幼稚園の時から良い教育を受けているが、過保護されているため、大人になっても、逆境を耐え忍ぶことができず、ちょっとしたつまずきで落胆してしまい、困難から逃げてしまうのである。着実に仕事をする気持ちが欠けているので、当然のことながら、収入が低い。その結果、常に親のサポートを求めるのである。

“啃老族”たちは非現実的な高遠な目標を追い求めているが、社会人になっても社会に融け込む心の準備はできていない。わがままで、ときどき自信過剰になることもある。しかし、プレッシャーやストレスに弱いので、彼らは頻繁に職場を変える。つまり、職場に適応できなくなったら、あるいは自分に都合の悪い話を責められたら、簡単に仕事を辞めて平気で親の支援を受けるのである。

また、家庭の原因としては、改革・開放を経て、中国の社会が豊かになったため、遊んでばかりいて働かない人を養う余裕ができたこともあげられる。1979年、一人っ子政策が実施されて以来、中国の家庭構造は子供1人、親2人、祖父母4人ようになってしまった。いわば、子供1人が6人の大人に囲まれているので、家庭の殻によって至れり尽くせりで保護されているのである。

親の子育て態度も“啃老族”の増加を助長している。子どもが大学を卒業して仕事をしなくても、親が喜んで甘んじるからである。子供1人、親2人、祖父母4人のような家族構成では、家族のすべての夢が子どもに託されているので、親が子どもの能力などを無視して高遠な目標

を立てて、自分の考えなどを無理に押し付けるのである。

子どもは、自分の意志で仕事を選んだわけではないので、手に入れた職業を大切にしない。任に堪えなくなったら、仕事を辞めてしまうのである。しかし、親は子どもを溺愛しているので、子どもが困難にへこたれて、頻繁に職場を変えても、理の当然のように受け止めることが多い。新しい仕事が見つかるまで、子どもがぶらぶら遊んでいても、親が放任するのである。

子どもの将来について、考えだけが先走るがゆえに、我が子の能力を過大評価してしまうのである。中国の親は常に子どもの健康状態などに気を配るが、子どもの独立意識、苦勞する意識の養成をおろそかにする傾向がある。つまり、親たちの中にある、頭腦を働かす者は人を支配し、肉体を働かす者は人に支配さるという偏見が、足元を固めず高望みするという結果を次第に醸し出しているのである。

更に、“啃老族”が生まれた背景的要素として、中国の教育システムの問題も指摘しておかなければならない。現在の中国の教育システムはいろいろな弊害を生み出している。学生が小学校から大学までは一生懸命に勉強するけれど、もっぱら進学するための教育を受けているので、大学を卒業しても自分の人生計画をうまくたてることができない。“高分低能”（点数が高く能力が低い）ということばは、まさにそのような、社会に適応する能力のない人たちの的確に表現しているのである。

“啃老族”の生まれた社会的要素について考える場合、もう一つの事実を見逃してはならない。それは“学而优则仕”（学問ができる者は役人になる）という伝統文化の影響である。このような伝統をもつ中国社会においては、肉体労働を軽視する風潮があり、権力に対する崇拜が根強い。肉体労働を軽視する結果、考え方が浮ついてしまい、目的達成の裏付けをないがしろにしがちである。

“啃老族”という現象は経済状況が良い家庭に限らず、経済的にそれほど恵まれていない家庭にも見られるようになりつつある。都会に生まれた若者は、学歴がなくても、汚い仕事、きつい仕事、危険な仕事を敬遠する傾向がある。ひどい場合は、年金生活の親に頼って苦しい生活をしていても、平気でいられる人がいるようである。

“啃老族”と正反対の意味を表す新しい表現は“奔奔族”である。ここの“奔奔”は休みなく奔走するという意味である。“奔奔族”は主に1970年代後半から1980年代前半の間に生まれた、懸命に働いている人たちを指す。同じ若者でありながら、“奔奔族”たちが張り切って精を出しているのと対照的に、“啃老族”たちはぶらぶらと遊んでばかりいて真面目に仕事をしないのである。

4.2. “隠婚族”

“隠婚”は文字通り、結婚のことを隠すという意味である。現代中国の社会において、結婚の相手がいないことで頭を悩まされている人もいれば、結婚していても公開せず、独身だと言

い続ける人もいる。このような、婚姻届けを出しているにもかかわらず、結婚の事実を隠し続け、独身の姿で公の場で活動する人々のことが“隠婚族”と呼ばれている。

“隠婚族”と呼ばれる人はほとんど多国籍企業や大手企業のホワイトカラーであり、女性が中心になっている。また、“隠婚”という現象は“北上広”（北京・上海・広州）のような大都会に多く見られ、年々増加の傾向にある。“隠婚族”の特徴として、次の4点が指摘できる。

- ①人との付き合いに熱中するが、祝祭日には会社に姿を現さない。
- ②公の場で異性と親密にするが、単独で異性と付き合うことはしない。
- ③独身貴族と言いつらしていながら、なるべく恋愛関係の話題を避ける。
- ④会社で電話を受け取るときに、得体が知れない口調で話することがある。

“隠婚族”の存在は競争社会における現代中国のキャリアウーマンの窮地を反映している。現代中国の社会は男女平等になったといわれているけれども、実際の職場においては、女性に対する差別がまだ根強く残っているようである。“隠婚族”には30歳前後のキャリアウーマンが多く、彼女たちの結婚事実を隠す目的は婚姻責任を逃れたいためではなく、職場での権益を失いたくないからである。

また、多くの会社ではキャリアウーマンの存在が大きく、会社側もキャリアウーマンに大きな期待をかけている。しかし、昇進の話になると、既婚の女性がどうしても不利になってしまう。妊娠、出産、さらに育児をする女性は会社にとって利益にならないからである。結婚している事実を公表したら、昇進の道を自ら閉ざすことになる。したがって、向上心の強いキャリアウーマンは会社での権益を守るため、よりよいポジションを得るため、やむをえず、結婚事実を隠さなければならないのである。

職場の人間関係も結婚事実を隠すことの原因の一つである。毎日いろいろな人と付き合いなければならないキャリアウーマンが家庭を持つということになったら、取引先の男性から敬遠されることはもちろんのこと、社内の同僚からも疎遠される心配もある。相手にしてもらえなくなったら、パートナーたちと触れ合う機会が少なくなり、情報を得にくくなる恐れがある。つまり、結婚したことが原因でステータスが下がり、まわりの男性が気にかけてくれなくなることを危惧して、“隠婚族”になるのである。

改革・解放によって、社会環境が変わったことも“隠婚族”が年々増加する原因の一つとしてとらえられる。昔は婚姻届けを出すのに、勤務先の証明書がなければならなかった。しかし、法改正で、勤務先に報告する必要がなくなった。そのため、本人から結婚事実を打ち明けない限り、知られることはない。つまり、昔は結婚事実を隠すことが出来なかったが、今は、仕事を円滑に運ぶために、異性からの協力を得るために、“隠婚族”になったほうがメリットが大きいと考えていけば、結婚事実を簡単に隠すことができるようになったのである。

“隠婚”という現象は中国社会の競争の激しさをあらわにしている。しかし、結婚事実が簡単に隠せるということは、中国社会が昔と比べて進歩したことを意味している。つまり、政府

の規制緩和によって、個人の自由はある程度、保障されたのである。

4.3. “混章族”

2013年の大学進学率は30パーセントを超え⁸、大学教育はもはや秀才教育ではなくなった。大学卒業生の急増に伴い、大学生の就職は難しくなってきた⁹。就職氷河時代と言われている今日では、就職するための要件として、一定期間のインターンシップが義務付けられている。具体的に、就職活動をするにあたって、公印付きのインターンシップ受け入れ先の証明書の提出が要求されているのである。

しかし、大学生はインターンシップという名義で積極的に企業に行くが、本気で仕事を体験するかどうかは別である。企業で毎日を無駄に過ごしている大学生は企業からまったく評価されない。このような、インターンシップの名義で、企業に行くが、就業体験もせず、いい加減に過ごして、これということを何ひとつ身に着けなかった大学生のことが“混章族”と呼ばれている。

“混章族”は動詞の“混”(どうにかこうにかして、何かを手に入れようとする)と名詞の“章”(印章)と接尾語の“族”からなっているものである。動詞としての“混”は、またいいかげんに過ごし、何事もできないという意味も含み持っている。

“混章”(どうにかこうにかして印章を手に入れる)は“混帳”(ろくでなし・ばかもん)と字音が同じなので、いい加減なことをしてインターンシップの証明書を取得しようとする学生のことは、また“混帳族”とも呼ばれる。“混章族”にしても“混帳族”にしても、その言い方からもインターンシップ受け入れ先の苛立つ気持ちが想像できる。

“混章族”のインターンシップをする目的は、企業活動について体験するためではなく、履歴書に記録を残したいだけである。履歴書が華やかであれば、就職活動をする際に、有利になると考えているからだろう。さらにひどいのは、企業に行かずに、友人や親せきに頼んで、公印を押してもらっただけで済む人があるようである。“混章”(どうにかこうにかして印章を手に入れる)という行為は自分をだまし、人をもだますから、確かに“混帳”(ろくでなし・ばかもん)である。

“混章”という行為は過保護されて育った大学生からみれば、恥ずかしいことではないようだ。このような、楽なことばかりをやりたがる大学生に対して懸念の声が出ている。経験と能力がなければ、たとえ就職ができて、仕事をうまく成し遂げることが難しいだろう。考え方や行動が浮ついて、しっかりとしないという意味において、“混章族”は“啃老族”と共通しているのである。

⁸ 2013年11月20日の《人民日報》の記事、《最难就业年如何破解》を参照。

⁹ 2009年以降、大卒就職率は86%台で推移しているが、2013年はこれを下回ると推測されている。

4.4. “月光族”

現代中国語では、“光”が名詞として「ヒカリ」という意味を表すほかに、形容詞として「光る」「輝く」という意味を表すこともある。“光”は、また“吃光”（全部食べてしまう）“喝光”（全部飲んでしまう）“用光”（使い果たす）“烧光”（すべてを焼き払う）“抢光”（すべてを奪い取る）のように動詞の後について結果補語として用いられることもある。

結果補語の意味・用法から動詞の意味・用法が派生した。動詞として使う場合、“光盘运动”（お皿のものをきれいに食べる運動）のように「何も残さない」という意味を表し、“月光族”における“光”は“光盘运动”における“光”と同じ性格のものである。「何も残さない」という意味を表す動詞の“光”は結果補語としての“吃光”“喝光”“用光”における“光”の意味と同じである。“月光族”は「まったく貯金をせず、その月の給料を全部使い果たす」現代の若者のことを指す。

“月光族”と呼ばれる人は仕事を持つ20代の未婚の人が多い。彼らは、中国経済が配給制度から市場経済に移行し、物質的に豊かになり始めた1980年代以降に生まれて成長した世代である。子どものころは“小皇帝”とも呼ばれてきた彼らは何でも自分が優先された環境に慣れて育った世代である。彼らにとって、親の世代まで続いた「貯金をして将来に備える」という伝統的な生活理念は陳腐のように見えるだろう。

“月光族”が求めているのは今現在の喜びと、ワンランク上の生活である。ぜいたくな生活を優先にしているので、金を惜しむことなく常に新しいファッションや新しい楽しみをやみくもに追い求めているのである。高価なブランド製品を買ったり旅行したりして、気楽に愉しく暮らしているのである。

“月光族”の増加に伴って、“月光经济”ともいうべき経済現象が生まれている。今、北京、上海、広州などの大都会では“月光族”をターゲットとしたマンションの開発が進んでいる。間取りはシングル向きで、デザイン重視などがセールスポイントとなっている。マンションは管理人付きの24時間管理体制を採っている。また、“月光族”はマイカーブームの影響で好きな車を買うのに収入をつぎ込むことをいとわない。

“月光族”と“啃老族”は共通する面もあれば、相違する面もある。共通点としては、自己本位で金銭感覚が麻痺していることなどがあげられる。相違点としては、前者の“月光族”が目標を実現するために一生懸命に努力し、稼いだ金を全部自分のために使い果たすのに対して、後者の“啃老族”は、働く意欲がなく、もっぱら親のすねをかじるということが指摘される。

4.5. “撞车族”（“碰瓷”）

相手の運転ミスをねらって、わざと相手の車に接触し、高額の修理費用や慰謝料を恐喝する無法者たちのことは、“撞车族”と呼ばれている。“撞”は動詞で、ここでは「衝突する」「ぶ

つける」といった意味を表している。

2013年、中国の自動車生産台数は2200万台を突破し、連続5年世界一の座を維持している。車の急増は交通事故や環境問題だけではなく、治安問題ももたらしている。“撞车族”という表現は自動車の急増がもたらした治安問題の深刻さをむき出しているのである。

北京あたりでは“撞车族”のような無法行為が“碰瓷”（“碰”は「ぶつける」の意味である。“瓷”は磁器の意味であるが、ここでは自動車などの塗装に使われるラッカーのことで、傷つきやすいものを暗示している）とも呼ばれている。

“撞车族”と“碰瓷”は同じ事柄を表すが、前者が行為を実行する集団にフォーカスをあてているのに対して、後者が行為そのものにフォーカスをあてている。“撞车族”よりも“碰瓷”のほうが真に迫った言い方で、もっと適切な表現だと思われる。修理代をつり上げるために、“碰瓷”に使われる車は高級車が多い。“撞车族”は主に他の地域の車を恐喝のターゲットとしている。衝突事故を起こしたあと、人数が多いことを笠にきて、示談に持ち込み、高額の修理代をゆすり取るのである。

“碰瓷”をやるためには、まず運転技術が要求される。自分の車が外見上、ぼろぼろにならないと、法外な修理代をふっかけることができない。そのため、体当たりをして車のボディーが惨めになるほどよいが、重要な部分は大した損傷を受けないのが金を騙し取る秘訣である。また、死傷者を出してはいけない。もっとも肝心なのが事故の全責任は相手側にあるようにしておき、弁解のしようがないようにしておかなければならない。

“撞车族”（“碰瓷”）の登場は、モラルの低下のほかに、中国の自動車保険システムにも関係があるようである。保険会社に事故を報告しても、手続きが煩雑であるため、当事者は面倒をいやがる。とくに省外（県外）で事故を起こした場合は、もっと時間と精力が必要になるため、示談で解決すれば、手間などをかけないですむというメリットがある。しかし、示談によって解決しようとする意識は、“碰瓷”のような犯罪行為を逆に助長しているのである。

学校教育の中身が現実離れをしていることも“撞车族”（“碰瓷”）のような無法行為が生じる一因である。義務教育が普及されたが、かつての道德教育は社会主義の理念に基づき、愛国主義を中心に推し進められていた。最近は人間尊重、生命尊重の精神に基づき、道德教育の内容が見直されているが、その効果はまだ出ていない。拝金主義が蔓延している現在、人間の自然的本能と誠実、正義、信頼との対立をどう調整するか、道德教育の内容が問われている。

4.6. “考碗族”

“考碗族”における“碗”は“饭碗”（飯茶碗）のことである。“饭碗”は比喩的意味として職業や生活のよりどころを指すこともある。例えば、“砸饭碗”（ここでは“砸”が「割る」「砕く」の意味）は飯の食い上げになるということであり、“找饭碗”（“找”は「さがす」「見つける」の意味）は「仕事をさがす」のように解釈することができる。

“考碗族”における“考”は動詞であり、「試験をする」「試験を受ける」という意味を表し、“碗”は職業という意味を表している。“考碗族”というのは、安定的な生活を求めて公務員試験を受ける人々のことを指す。

かつては、社会主義計画経済のもとで都市部での就業形態は、労働力が役所から企業へ配属され、就職してから定年後死ぬまで、勤務先から住宅、医療費、年金の受給などが保証されていた。定年退職するまでの常用労働者としての安定的就業形態は“鉄饭碗”（鉄の飯茶碗は割れる心配がないことから、親方日の丸の仕事に替えられる）と呼ばれるが、このような保障を受けられない農村部の人からみれば役所や国有企業に勤務することは、一種の特権を手に入れることになり、不平等感を募らせても仕方がない。

親方日の丸の仕事についていることは“端着鉄饭碗”（食いはぐれのない働き口をもっている）といわれていたが、1990年代から始まった国有企業の改革によって、親方日の丸的システムが打破された。民営化された企業においても能力給が主流になっており、企業の破産は日常茶飯事のようにになっている。

国有企業の民営化と対照的に政府機関においては、仕事ぶりや能力に関係なく、定年退職するまで機械的に均等の待遇を受けるのである。公務員になることはまさに割れる心配もない鉄の飯茶碗を手に入れるようなことで、最近では若者の安定志向により、公務員試験を受ける人が年々増加している。

“考碗族”の増加に伴って、国家公務員試験の競争率がますます高くなっている。2005年の倍率は37：1であるのに対して、2006年は48：1となり、2007年の倍率は60：1となった。さらに、2013年の倍率は239：1になっている。

市場経済の波にさらされ、企業破産のニュースが毎日のように報道されている今日では、民間企業に就職してもリスクを伴う。それより、いかなる状況でも、飢える心配のない国家公務員や地方自治体の公務員が若者を中心に人気がある。“考碗族”は大学の卒業生に限らず、有職者も少なくない。また、“考碗族”は1ヶ所だけではなく、あちらこちらで公務員の試験を受けるのが特徴のひとつである。

“考碗族”という言い方が生まれたことによって、最近では“鉄饭碗”の意味が変わった。“考碗族”の内部では、公務員試験を受けることを“考碗”というが、受ける試験の内容の違いによって、“考金碗”“考銀碗”“考銅碗”“考鉄碗”のように分けられている。「金」は「銀」よりも価値が高いため、国家公務員試験にチャレンジすることは、“考金碗”と呼ばれ、省の公務員試験を受けることは“考銀碗”と呼ばれている。「銅」と「鉄」は「金」「銀」より価値が低いため、当然のことながら、市レベルの公務員試験に合格した場合は“銅碗”を手に入れたことになり、県（村、町）レベルの公務員試験に合格した場合は“鉄碗”を獲得したことになる。

“考碗族”の増加する要因として、若者の安定志向が挙げられる。経済発展の傍ら、貧富の

格差や官僚の特権などに庶民の不満が高まっている。若者は経済発展の恩恵をさほど受けていないので、将来への希望の少なさが安定志向につながっている。つまり、経済発展の恩恵を享受するためには、特権階級の一員になるのが早道である。

公務員志望の増加は、将来への不安によるものであるが、背景として存在する社会保障システムの弱さも原因の一つとしてとらえられる。社会保障が整備されない限り、公務員の特権を打破しても“考碗族”は増え続けよう。本来、反骨精神のある若者が社会構造変化のツケを押し付けられた結果、リスクを取らなくなったのである。

4.7. “蚁族”

“蚁族”は大学を卒業したばかりの低所得者を指している。“蚁”は「蟻」の略字である。大学を卒業したばかりの低所得者はアリのように、朝から晩までせわしく立ち働いていることからそのように呼ばれているのだろう。中国語における「蟻」の認知的意味は「昆虫」のほかに、根気よくこつこつと大きな仕事を成し遂げるという意味もある。つまり、“蚁族”の認知的意味は必ずしもマイナスとは限らない。

“蚁族”と呼ばれる貧困層の若者は知能指数が高い。しかし、仕事や収入、生活能力などの面においては、弱い立場にある。今日では、“蚁族”が農家の人々、出稼ぎ労働者、リストラされた人々に次いで、四番目の負け組とされている。それにもかかわらず、彼らは自分の夢を捨てず、現状打開を目指して絶えず努力を続けているのである。

2008年のリーマンショック以降、大卒の就職状況は急速に悪くなり、仕事を求めて大都会に集まった新卒は理想の仕事が見つからないため、保険の販売、飲食業といった賃金の低い仕事を甘んじて受け入れるしかない。しかも、就職ができて、会社からは医療保険や失業保険や年金保険などを払ってもらえないケースもある。

“蚁族”たちは夢の実現を目指して、アリのようにこつこつと働くが、収入が低いので、郊外の狭いアパートを借りて暮らすのが普通である。ひどい場合は地下室や防空施設を借りて住むケースもある。地下の施設に住む“蚁族”のことは、また“鼠族”（次節で詳しく述べる）とも呼ばれている。“蚁族”の暮らすエリアは“蚁域”と呼ばれている。

“蚁族”の数はどれぐらいいるか、詳しいデータはない。“蚁族”現象の悪化は1999年以来、大学卒業生が急速に増えたことと関係するが、若者の都会志向や就職観念も原因である。つまり、“宁要北京一张床，不要外地一套房”（地方で家を持つよりも、むしろ北京でベッドを一つ持ったほうがよい）という観念や人生の成功は大都会にあるという観念に駆り立てられて、多くの大学生は“北上广”（北京・上海・広州）のような大都会での就職を選んでいるのである。

夢がかなうように、生活のより便利な大都会に赴くが、中国特有の戸籍制度という壁に突き当たり、就職活動にしても、創業にしてもままならないことが多い。さらに、戸籍を持っていないことが原因で、居住地で公営住宅を申請する資格がない。しかし、彼らは固い信念を持ち、

けっして挫けることはない。“蚁族”現象はすでに注目されるようになったが、戸籍の規制が緩和されない限り、低所得者向けの公営住宅が充実されない限り、改善は見込めない。

4.8. “鼠族”

“鼠族”はモグラのように暗くて乱雑なところに住んでいる人々のことを指しているが、狭義的に解釈すれば、主に北京で地下の施設を借りて暮らす貧困層を指すのである。若者の大都会志向により、北京は外来人口がどんどん増え、家賃もどんどん上がっている。それに伴い、出稼ぎ労働者や大学の新卒が中心となる貧困層は“蚁族”として地上で家を借りて生活することはだんだん手の届かない望みとなってきた。

なぜ、“鼠族”たちは故郷に戻らないかといえば、原因は地域の格差に求められる。生活が不便で医療条件が悪い故郷より、大都会のほうが魅力的である。“北上广”（北京・上海・広州）での収入は少ないとはいえ、貧困地域の数倍である。

不動産価格の高騰、及び2008年以降の世界同時不況は“鼠族”の誕生の直接原因である。中国国家统计局によると、2013年11月1ヶ月の住宅価格は前年比10%上昇した。北京の上昇幅はもっとも大きく、住宅価格は16%上昇し、家賃の価格は12%上昇した。2012年の北京市の総人口は2069.3万人に達し、そのうち、北京市の戸籍を持たない、いわゆる「外来人口」は773.8万人¹⁰で、全体の37.4%を占めている。

《南方都市报》は独自の調査に基づいて、北京市の「外来人口」の約五分の一は地下の施設に住む“鼠族”であると推測している。しかし、北京市はこれを否定し、2012年の調査で、約28万人が昔の防空施設や地下室を利用しているという¹¹。

2013年3月閉幕した中国の全国人民代表大会で習近平国家主席と李克強首相を中心とする新政権が発足した。習近平国家主席は閉幕演説で、“中国梦”（チャイナ・ドリーム）というフレーズを9回も繰り返した。このフレーズに国民のさまざまなドリーム（例えば、出稼ぎ労働者は都市部に定住することをドリームとし、20代、30代の若い夫婦は自分の家を持つことをドリームとする）が集約されているのだろう。

しかし、チャイナ・ドリームを現実化するためには、まず直面した大気汚染、交通渋滞、環境汚染、食品安全、住宅価格、格差拡大などの問題を解決しなければならない。中間層のマイホーム・ドリームは不動産価格の高騰によって打ち砕かれ、投機目的で不動産を購入する一部の裕福層が住宅の転売によってさらに財産が増える。

さらに出稼ぎ労働者や若者といった弱者はマイホームどころか、地上で家を借りることも難しくなってきた。不動産価格の高騰は貧富の差の拡大という悪循環を導いているのであり、都市部でマイホームを持つことは高嶺の花になりつつあるのである。

¹⁰ 北京市统计局《北京市2012年国民经济和社会发展统计公报》を参照。

¹¹ 北京市统计局《北京市2012年国民经济和社会发展统计公报》を参照。

“蚁族”“鼠族”という表現は苦境下の中国の負け組の実態をリアルに描き出している。所得の格差や地域の格差を縮めるためには、社会保障システムの整備、戸籍制度の改革、さらに貧困地域の底上げなどを本気で取り組まなければならない。これまで速いペースで経済成長を成し遂げた中国だが、これからは成長モデルの転換や格差の是正を優先課題としなければならない。

5. むすび

流行語は社会現象の縮図である。以上で述べてきた流行語は、いずれも今の中国社会の一端を外面的、感性的にとらえたものである。“啃老族”“隐婚族”“混章族”“月光族”“撞车族”“考碗族”“蚁族”“鼠族”といった流行語は、まだ普通の言い方として新聞やテレビなどでは使われておらず、辞書に定着していないようだが、その暗示的意味から中国社会の移り変わりを端的にうかがい知ることができる。

中国は改革・開放を実施してから35年になり、市場経済の道を歩むと宣言してから、もう20年以上経った。経済の高度成長が続き、国民の生活水準や教育レベルの向上が目覚しい。しかし、それとともに、道徳の退廃や拝金主義の蔓延も深刻になりつつある。“啃老族”“奔奔族”“隐婚族”“混章族”“撞车族”“考碗族”“蚁族”“鼠族”などは激動している現代中国社会の鏡でもある。

主要参考文献

- 李杰明, 李杰群 (2000) 《汉语流行口语》 华语教育出版社
刘鸿模 (2000) 《词语流行风》 广东旅游出版社
郝时远 (2002) 《Ethnos (民族) 和 Ethnic group (族群) 的早期含义与应用》, 《民族研究》2002年第4期
李淑娟, 颜力钢 (2006) 《最新中国俚语》 新世界出版社
夏中华主编 (2007) 《中国当代流行语全览》 学林出版社
文汇新民联合报业集团新闻信息中心 (2007) 《中国流行语2007发布榜》 文汇出版社
杜中明 (2008) 《新词酷》 中国工人出版社
文汇新民联合报业集团 (2009) 《2009发布榜中国流行语》 文汇出版社
李颖主编 (2010) 《09后热门》 山西经济出版社
刘吉艳 (2010) 《汉语新词群研究》 学林出版社
侯敏, 周荐 (2011) 《2010汉语新词语》 商务印书馆
中华人民共和国国家统计局 (2012) 《中国统计年鉴》 中国统计出版社
平凡社 (1980) 『世界大百科年鑑スペシャル 1973~79』 平凡社
佐藤郁哉 (1984) 『暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛』 新曜社
信田信治 (1992) 『社会言語学』 おうふう
三省堂 (2000) 『デイリー新語辞典』 三省堂
自由国民社 (2011) 『現代用語の基礎知識』 自由国民社
自由国民社 (2014) 『現代用語の基礎知識』 自由国民社